

ラウントリ―とベヴァリジ

――イギリス福祉国家への道――

井 垣 章 二

序

- 一 ラウントリ―貧困調査と新世紀
- 二 社会改良時代とベヴァリジ
- 三 両大戦間のラウントリ―とベヴァリジ
- 四 ベヴァリジ報告作成とラウントリ―
- 五 福祉国家成立をめぐる
- 六 政治・思想におけるラウントリ―とベヴァリジ

序

戦後、一九四〇年代後半におけるイギリス福祉国家の完成は、社会問題への対応として、とりわけ今世紀初めから展開された社会福祉政策の到達点であるとともに、周知のように、それは直接的にはベヴァリジ・リポートの現実化であった。英雄の時代は遠く、ますます組織の時代になってゆくこの二〇世紀に、なお巨人は健在であったというべしである。「もしベヴァリジがなかったなら福祉国家は？」という問いかけは決して不適切でないと思うからである。かくしてベヴァリジを福祉国家の最大の功労者の一人とするとして、もう一人を選ぶとすれば簡単でないかもしれない。しか

しこの場合、ラウントリーというのはどうであらうか。戦後、世論はベヴァリジを「福祉国家の父」⁽¹⁾とし、ラウントリーはその死を惜しまれてロイド・ジョージ夫人によって「福祉国家のアインシュタイン」と命名された。⁽²⁾ベヴァリジもラウントリーもともに一八七〇年代の生まれであり、ヴィクトリア朝の、そしてあの「貧困」の時代に青年期を過し、貧困問題の究明・解決に熱意あふれる若者として取組み、二〇世紀の社会問題と社会福祉政策に一貫してかわり続け、戦後福祉国家の完成を十分みとどけるまで生き続けた。その評伝においてブリッグス (A. Briggs) は「事実、彼 (ラウントリー) の個人史は同時に二〇世紀イギリスの社会史 (Social Biography) でもある」という。⁽³⁾ベヴァリジについても優るとも劣らず同様のことがいえよう。かくして以下、この二人のケース・ヒストリーを通してイギリス福祉国家の形成発達過程があとづけられるわけである。⁽⁴⁾

一 ラウントリー貧困調査と新世紀

ラウントリーの第一回ヨーク調査、労働者階級貧困調査は一八九九年、彼の二八歳のときに行なわれた。ちなみにエングルス (F. Engels) の調査、『イギリスにおける労働者階級の状態』は彼の若冠二五歳のときの労作であるし、ブース (C. Booth) のロンドン調査は、彼の四〇なかばからのものである。とにかく二八歳のラウントリーをして貧困問題とその調査研究に向わしめたものは何であつたらうか。

B・シーボーム・ラウントリー (B. Seeborn Rowntree) は一八七二年七月七日、ジョセフ・ラウントリー (1836-1925) と一児を残して早逝した先妻のあとをうけた第二の妻エマ・アントワネットとの第三子として生まれた。ラウントリーの祖父ジョセフ一世 (1801-1859) は一八二二年、ヨークに食品店を始め、事業とともに社会的関心をもち、社会奉仕的活動にも熱心な人物であった。父ジョセフ二世はこれを受け継ぎ、事業と社会的活動ともども著しく発展させた。事業については弟ヘンリーとココア・チョコレート製造業を始め、ラウントリーが生まれた一八七一年には三〇人

の従業員であったが、一〇年後には三〇〇人、一八九〇年代なかばには九〇〇人、一九一〇年には四〇〇〇人を越える高度長成をなしとげている。国際的メーカーとしてラウントリー社は今日も健在、われわれ日本人もそのビスケットなど、知らずに結構食べているはずである。一方、社会的活動としては、クエーカー教徒として、貧児学校、病院などの事業に協力、教徒の設立する成人学校で教えたり、労働者のための図書館を建てたりして活躍、さらに、単なる書きものでなく統計資料等による事実究明も含む文明論 (*British Civilization*) や貧困論 (*Pauperism in England and Wales*) など著書もあらわす知識人もあった。ラウントリーはそこに生まれ育ったのであり、このことは将来彼が、「福祉国家のアインシュタイン」ともなるべく、家庭環境そのものにおいて恵まれていたといふべきである。

一〇歳頃まで婦人家庭教師によって教育され、土地のクエーカー寄宿学校に通い(すぐ家の近くで寄宿の必要はなかった)、一八八七年そこを出てマンチェスターにあるオウエンズ・カレッジに進んだ。ブリッグスはラウントリーの評伝において、パブリック・スクールやオクスフォード、ケンブリッジの影響を全く免れたことを、ラウントリーの人間形成のうえで一つの特質としている。カレッジは五学期を過ぎただけで単位も取らずじまいだが、化学の講義と実験には非常に熱心であった。一八歳で当時、従業員六〇〇人に達していた家業に従事するが、彼は工場に小実験室をつくり、彼の習った化学を家業に役立てるべく仕事にはげんだ。

彼の家庭は従来熱心なクエーカー教徒であり、彼の社会的関心と社会的活動へのコミットメントは、このクエーカーの宗教的精神が大きな影響をあたえている。われわれの生命はわれわれ自身のためにあたえられたものでなく、神のために生きるためであり、自我をのりこえなければならぬ。彼はヨーク成人学校の教師となり、その仕事に熱意を注ぐが、こうした自己の信じるところを教室で訴え、そのことよって自からが信念を確立することに努めた。そしてこの成人学校こそ彼が労働者と親しく接する機会をあたえ、労働者の生活、貧困の問題にかかわる動機づけとなったのである。一八九五年、ニューキャッスルのスラムを歩き、このキリスト教文明の大中心地のなかに何たるかが……と大き

なショックをうける。同年、救世軍創始者ウイリアム・ブース (William Booth) はロンドンにおける貧困の実態を明らかにしその救済策を訴えた『最暗国のイギリスとその出路』(The Darkest England and Way Out) を発表するが、ラウントリーはそれに深く感動し、彼のクラスにもこれを話題としてとりあげ聴衆に訴えた。

一方、学生時代、化学に特に興味をもった彼は、社会の究明と問題解決に統計学等科学的方法を用いる可能性と必要性をますます固めていった。チャールス・ブース (Charles Booth) は一八八六年にロンドン調査を始め、そして一八八九年、ラウントリーの一八歳のときにその第一報を発表した。彼が何時それを手にしたかは明かでないが、ブースの方法と結論に非常に印象づけられ、ロンドンはロンドンの事情として、他のイギリスの町々ではどうなのであるうか、わが町ヨークではどうなのかとラウントリーは考えていく。ヨーク調査の計画は一八九七年心に浮かび、準備を終えて一八九九年調査を開始、結果報告『貧困——都市生活の一考察』(Poverty: A Study of Town Life) が二〇世紀の第一年目、一九〇一年に出版される。調査研究に専心するに際して彼は個人的事情にも恵まれた。一八九七年、新しい化学者が採用され、彼は工場の仕事を離れ調査研究に専念することができたからである。人口七万の小都市ヨークの調査は規模においてブースの調査に劣るとはいえ、厳格な貧困概念の確立、調査対象の確定(全労働者階級直接調査)等、その系統性、精密性において非常にすぐれたものであった。

この調査の効果は第一に、なお当時根強く存在したブースの発見事実に対する疑念(そんなに大量かつ深刻な貧困があるとは考えられない)を打ち砕き、ブースの正しいことを立証し、貧困の大きさと深さをイギリスの厳然たる事実としたことである。第二には、これに結びついて、それが事実である限り、問題は最早や放置されるべきでなく、文明国の名において対策の必要不可欠であることを知らしめたことである。それを力強く訴えたラウントリーのその「結論」⁵⁾は、エレン・ケイ (E. Kay) の有名な『児童の世紀』(一九〇〇年)に对照すべき「福祉の世紀」への夜明けの警鐘とでもいえよう。果たして二〇世紀は、一九〇五年失業労働法、一九〇六年学童給食法、一九〇七年学童保健法、一九〇

八年老齡年金法、一九〇九年職業紹介法、一九一一年國民保險法等、目覚しい社会福祉政策の展開となり、ラウントリの調査はそれを正当化する論拠として生かされたのである。

一九一一年の健康・失業保険は、いわゆるリベラル・リフォームの頂点を形成するものであり、ロイド・ジョージ(D. Lloyd George)の國民保險として有名である。ロイド・ジョージはチャーチル(W. S. Churchill)とともにこの期を代表する大政治家であるが、彼は一九〇七年、ラウントリの自宅を訪問して『貧困』について語り合い、また、彼の政治演説の中で『貧困』を再三話題にとりあげている(『貧困』はチャーチルにも大きな衝撃をあたえた)。二人は〈勤〉と〈静〉と全く対照的な性格のもち主であったが、関係はますます親密に、生涯にわたって続くのである。

ところで、この段階でラウントリからひとまず目を転じることしよう。この二〇世紀初期の社会改良時代、そしてこのロイド・ジョージの國民保險法についても重大な役割を果たした今一人の登場人物、ベヴァリジの目覚しい行動はずでに始まっているからである。

二 社会改良時代とベヴァリジ

ベヴァリジは、インドに渡って判事をしていた父ヘンリー・ベヴァリジと本国で教師をつとめるうちにインドの問題に関心をもち渡印した母、アンネットとの間の第一子として一八七九年五月五日に生まれた。ラウントリとは八つ年下ということである。この場合も母は、一児を残して早逝した先妻の後の二度目の結婚であった点、奇しくもラウントリの場合と同様である。ヘンリーは、それが出世の妨げともなった自己をつらぬく信念のもち主で、仕事のかたわら東洋研究に関心をもち学者気質の人で、家庭や子どものことは、専らアンネットの支配するところとなっていた。子どもは姉(先妻の子)、ベヴァリジ、妹、弟の順序で、家族は二六人の召使にかしづかれる高級官吏の、植民地インドの優雅な生活であった。

一八九〇年、イギリスに戻ったとき弟は死に、のち姉も一五歳で死に（もしベヴァリジが死んでいたら！）、少なくなつた家族はいつそう結束をかためた。少年期のベヴァリジの教育は、母はパブリック・スクールはきつすぎるとして、彼女が理想とする自由主義教育を行なう小さな私立学校に始まる。彼はめきめきと成績をあげ、翌年にはクラスでトップになり賞をもらっている。チャーター・ハウス (Charter House) への奨学金を得て、五年間勉強し、この間数学やとくに天文学に興味をもつ。一八九七年、オクスフォード大学のベリオール学寮に入る。その時のベヴァリジは敏感で自意識過剰、恥ずかしがりの孤独な青年であつた。しかしやがて、彼の人間形成に重要な影響をあたえる少数の親友にも恵まれた。その中には、ベヴァリジの複雑な性格に影響をあたえたと推察される奔放な若き詩人 C・A・カレがあつたし、社会改良への関心を共に育てあつた、また後、ベヴァリジの妹と結婚し生涯の友となる、学校を出てケースワーカーになつたタウネイ (R. H. Tawney) があつた。ジョージ・エリオットの作品から心の糧を吸収し、宗教は救世軍等極度な福音主義は嫌つたが、単なる精神や祈りでなく、この世でなすべき行動として受けとめ、ダーウィンの進化論、とくに生物学者ハクスリー (T. Huxley) の経験科学的方法論にたく共鳴する。これとともに社会問題、とくに大都市における問題に心ひかれ、社会改良への関心が次第に芽生えていく。なかでもロンドンのイースト・エンドの牧師ウイニントン・イングラム (A. Winnington-Ingram) の『大都市における事業』 (*Work in Great Cities: Six Lectures on Pastoral Theology*) はベヴァリジに大きな影響をあたえた。

かような状況の中でベヴァリジのトインビー・ホールへのかわりはラウントリーがヨーク調査を行なつた一八九九年の、その九月に始まる。彼はホールの代表者たちで開かれる新人募集会議に行き、セツルメント活動について知り、かつそれに感銘を受けたのである。しかしその時は、自分としては水泳ぐらいしか活動に貢献できないと思つたりして乗気にはならなかつた。しかしその冬にはホールを訪れ、アメリカからの見学者のような立場で二日間を過している。翌一九〇〇年にはホールを通じて派遣された労働者グループを大学に案内したり、もてなしを手伝つたりした。しかし

一九〇二年、ホールからレジデントとなることを勧誘されたが、そのときは応じずに終っている。

オクスフォードからロンドンに出てユニバーシティ・カレッジに法学研究のフェロウシップを得て、父がすすめる法律の勉強をする。しかし一九〇三年にはその興味を失い、教育関係の職を得ようとするがうまくゆかず、とかくするうちにトインビー・ホールの館長バーネット (C. S. Barnett) に副館長としてホールに来ることをすすめられ、両親は大反対であったが、考慮の末、結局それを受け就任した。

彼の自伝『強制と説得』(Power and Influence, 1953) は、彼の最初の社会的活動、このトインビー・ホール副館長時代から始まっている。恵まれた家庭環境出身の彼が、弁護士を目指す法学研究から社会福祉の現場へ、学校を出て初めての仕事として挺身したのは、オクスフォードのベリオール学寮長ケアード (B. Card) がチャールス・ブリスの調査に触発されて、訴えた次の言葉であったという。「諸君が大学にいる間、諸君の第一の任務は政治的博愛にあるのでなく自己修養にある。しかしこの任務を遂行し、オクスフォードで学ぶべきものをすべて学んだ後、諸君のうちの誰かにぜひやってもらいたいことは、英国に非常な富が存在しながら何故このように貧困があるのか、またこれらの貧困をどうしてなくすかを究明することである。」⁽⁶⁾

しかしベヴァリジの克明な評伝を書いたハリス (J. Harris) のこの面の検討によると、ベヴァリジの社会問題への関心はこれより先立っているし、彼とケアードとは基本的立場を異にし、関係も親密というわけでもなく、ベヴァリジ本人がいうことであるものの、ケアードの影響とすることには問題があるとしている。すなわちベヴァリジは何か集中する問題がなければおさまらない性質で、その焦点がその時、社会研究と社会改良に向けられていたこと、それとハクスリーの経験科学的方法論 (ケアードの思弁的方法はそれに対して劣るとベヴァリジはしている) に大いに共鳴したことであり、ベヴァリジをしてトインビー・ホールにおもむかせたのはケアードでなくハクスリーだ⁽⁷⁾ という。このハクスリーについてはラウントリも同様の影響を受けていることがここに想起されなければならない。

一八八四年、中産階級知識人が貧困地帯に自から居住し、隣人としての貧困労働者を理解し、生活・文化の向上をはかろうとする世界最初のセツルメント・ハウスは、一八六九年、牧師としてロンドンの最悪のスラム、ホワイトチャペルに於て、同時期に創設された慈善組織協会(COS)のオクタビア・ヒル(Octavia Hill)のパーソナル・アプローチに基づく社会事業活動を続けてきたパーネットによって、一八八四年に創立された。⁽⁸⁾パーネットの当初のパーソナル・アプローチは、彼と親友でもあったチャールス・ブリスによる貧困の社会的要因の発見等もあって、世紀転換期をめぐって社会的経済的構造を問う制度的アプローチに変わり、ラディカルにもなつてゆく。このホールの新しい展開を求めて、その一つとしてパーネットはベヴァリジを求めたのであった。当時のベヴァリジは恥ぢずかしがり屋の青年から、自己の能力に確信ももち、社会問題への新しいアプローチに熱意に燃える若者に変容していた。ベヴァリジがホールに入ったのは一九〇三年九月、彼の二四歳のときであった。

彼はパーネットとよき関係を維持し、教育活動の指導、機関誌の仕事を受けもち、当時ますます深刻化しつつある失業問題にかかわることを通じて、社会問題の根本は労働と所得の問題であり、つぎはぎの対策でなく基本的対策を、またパーソナル・アプローチでなく制度的アプローチをという考えを深め、精力的にその啓蒙に努めた。そしてそのことが社会問題とくに失業・労働問題のエキスパートとしてのベヴァリジの名を確立せしめることになったのである。

しかしベヴァリジはやがてホールの活動の限界に気付き、別の何かを求めようになつた。もともと彼は貧しい人たちのために仕事をするというのでなく、そこで優れた人と接し、活動を通じ組織体の管理・運営等について学習する教育・修練の場、より自分を発展向上させる場としてホールを考えていた。丁度その頃、保守系有力新聞、モーニング・ポストが党の社会改良思想宣伝のための適当なライターを求めていた。ケアードの推薦もあつてベヴァリジに白羽の矢がたてられ、ベヴァリジの方は自分は社会主義的な考えをもつもので適切でないとしたが、それでもよいということになり、年収五〇〇ポンドというかなりの高給で応じることになった。今度は先のホールの場合と違って両親は立派な仕事を得

られたとして賛成しかつ喜んだのである。このトインビー・ホールおよびモーニング・ポスト時代のベヴァリジの社会的活動と彼自身の社会問題と対策についての考え方の成長は失業問題をめぐって展開されている。彼の失業問題とのかかわりは、丁度ホールに來たとき失業がますます深刻な問題となり、失業対策がホールの大きな課題であったことから生じている。ベヴァリジは理論でなく現実からこれにかかわることによって失業問題研究を重ね、バーネットとともに政治家に対策の必要を訴えるなどアクションを展開している。一九〇五年八月、失業労働法が制定、同一〇月には中央失業者対策局 (Central Unemployed Body) が設立される。ベヴァリジはその局長になるが、彼は社会主義者からも右側のCOS代表者からも賛同推薦されたという。ポスト紙の仕事は午後九時から午前二時まで、生涯、ハードワークをモットーとしたベヴァリジは残余の時間を精力的にこの失業対策事業に打ちこみ、職業紹介制度の確立普及に尽力、大きな成果をあげている。ポスト紙の記事もこの問題に主力が注がれた。この制度は労働者個人の運命を改良するばかりでなく、産業社会全体の効率を高める最良の方法と彼は信じていた。

一九〇五年にはじまる救貧法改正委員会に失業問題も一つの重要な課題としていたが、一九〇七年、ベヴァリジはこのことでウェップ夫妻 (Sidny & Beatrice Webb) との関係ができ、両者は協力して失業対策の問題にとりくむ。さらに彼は職業紹介制度の研究のためにドイツにも渡るが、失業の一般的分析とドイツの資料を含むベヴァリジの報告書は委員会に大きな影響をあたえ、多数派、少数派ともども、その報告書には職業紹介制度がとりいれられている。またこの時期シドニー・ウェップのとりなしで商務省 (Board of Trade) のチャーチルに失業問題専門家として会い関係のできたことは、国家的失業対策の発展についても、またベヴァリジ自身にとっても大きな出来事であった。のちベヴァリジは職業紹介事業のために商務省のフルタイムの公務員として年俸六〇〇ポンドで招かれることになったからである。

失業の専門家としてのベヴァリジの地位は、一九〇九年の初め出版された『失業——産業の一問題』(Unemployment: A Problem of Industry) によって確立されたといえよう。この書は異常な売れ行きを示し、理論的にも実践的にも極

めて説得力あるものとして急進派から保守派にいたるまでその支持を得、失業にかんするスタンダード・ブックとなった。ロイド・ジョージを長とした時代から、ベヴァリジがむかえられたチャーチルのときも、自由な研究と活動を推進する商務省は政府の中のもっとも活潑な部局で、産業問題の多くの改革を成し遂げてきた。ベヴァリジはそこで職業紹介制度の行政細目を作成し、チャーチルがこれを取り、一九〇九年六月、職業紹介法はすべての党派の賛成を得て制定された。そしてベヴァリジは、それまではエキスパート・アドバイザーの地位でしかなかったが、この新制度の行政長となり、ここに名実ともに政府の上級官吏になったのである。

一方、失業保険については、委員会において早くから問題にされ、ベヴァリジ自身も一九〇七年あたりからその問題を考えていた。しかし、いづれかというベヴァリジは保険よりも職業紹介制度に重点をおき、保険の方は同局の僚友ルエリン・スミス (H. Llewellyn Smith)^(e) がこれに取組み、チャーチルもその通りの分担において二人に仕事をさせていた。かくしてスミスが一九〇八年一〇月、失業保険法の草案を書き、チャーチルによって議会に提出されたが、蔵相ロイド・ジョージは、大蔵省として疾病・廢疾にかんする社会保険を検討中であり、これが完成するまで待つことを要求した。結局、二つの保険、健康保険と失業保険は国民保険法の一章、二章とセットになってロイド・ジョージによって一九一一年五月に国会に上程、同年一二月に通過することになったのである。そうして二年後、すなわち一九一三年五月、職業紹介局と失業保険局はそれぞれ独立し、ベヴァリジは紹介局の局長となり、年俸一〇〇〇ドル、政府における重要ポスト、アシスタント・セクレタリーに昇格するのである。

三 両大戦間のラウントリーとベヴァリジ

イギリスはあの苛烈な第二次世界大戦の最中にわれわれの主人公ベヴァリジのリポートとして知られる福祉国家構想を完成させるが、二〇世紀初期の社会保障施策躍進の頂点を示す一九一一年国民保険法以後、第一次世界大戦を経過し、

第二次大戦の勃発までそれほどの大躍進はない。しかし失業保険制度の整備充実、寡婦・遺児・老齢拠出年金法（一九二五年）など注目すべきものがあり、後述するように、ここでもベヴァリジとラウントリの貢献するところ少なくない。しかしこの時期、二人は社会保障とは別の面で発展を示し、貢献をする。すなわちベヴァリジは第一次大戦中、食糧省等で戦時体制下の国内政治にかかわり、労働・失業対策にかんする戦後再建プランにかかわりもするが、ロンドン経済大学学長という学校行政にたづさわることが中心になってゆくと、ラウントリについては失業問題、産業・労働問題をめぐって政治にもかかわるが、工場経営、労務管理の分野で新境地をひらく活躍を示すのである。

まずラウントリから始めるならば、ベヴァリジは前述のようにすでに失業問題のチャンピオンになっていたが、同時期ラウントリも失業問題に重大な関心を示し、前述のベヴァリジの『失業論』（一九〇九年）に続いて同じく『失業論』(Unemployment: A Social Study, 1917)を発表している。⁽¹⁰⁾のち戦中、戦後を通じて失業問題についての調査研究を行ない、以後関係のますます親密になったロイド・ジョージに失業問題の重大性を進言し、一九二〇年、失業保険法の制定(改正)に一つの大きな影の力となっている。

同時にラウントリが重大にかかわった問題は土地・農村問題で、これは失業問題と劣らず当時のイギリスの国家的大問題の一つであった。これについてラウントリはフランス、ベルギーなど国外の資料も収集検討し、大作『土地と労働』(Land and Labour, 1910)をまとめ、この問題のエキスパートとなった。かくして彼はロイド・ジョージに引きたてられ、農業・土地問題にかんする委員会の主要メンバーとして大いにその役割を果たすことになる。続いて彼は『労働者と土地』(The Labourer and the Land, 1914)等この問題にかんする研究を次々と著わし、ここでは『貧困』の場合と違って、改善問題についての積極的提案を多く含めている。そしてそれのあるものはロイド・ジョージによって政治の中に生かされるのである。

社会政策と別の部面におけるラウントリの特筆すべき貢献は、産業における人間関係、マネージメントの問題につ

いてである。この面についてラウントリーがどれだけ評価されているかは知らないが、アメリカにおけるホーソン実験がこの面の試みの創始であり、かつ不滅とするなら、ラウントリーのヨーク工場の「実験」もそれになぞらえられてよいかも知れない。ブリッグスがいうように、もしラウントリーが「福祉国家のインシユタイン」であるなら産業人間関係問題の創始者としての榮譽もあたえられてもよいであろう。ヒューマニストとしてのラウントリーにとっては幾千人の従業員からなるヨーク工場は、もつとも身近な社会であり、この社会に人間の世界を築くことが課題になるはずだし、また労働・生活問題から、労働者福祉の基本として高賃金や雇用条件改善を可能にするためには、生産の能率を高めることが必要であり、そのためには産業は有効に人間的に組織されなければならないことになる。

しかし創始者はラウントリーでなくその父ジョセフ二世であった。女子従業員のアドバイザーとしてソシアル・ヘルパーの制度は早くも一八九一年にスタートさせているし、従業員と家族の医療互助制度も一八九〇年代の創設で、従業員経営参加としての提案箱の設置（一九〇二年）、工場医制度（一九〇四年）、年金制度（一九〇四年）、また従業員にニードに応じた教育・レクリエーション・クラブ活動の導入などすべて二〇世紀初期までの試みであり、労働条件についても、この時期、イギリスで最良の工場との評判を勝ち得ていた。父が始め、父子の協同作業となり、そしてラウントリーが主となって行なうところとなりこの活動はさらに躍進した。

一九二〇年計画、二二年スタートの企業内に心理部の設置による、イギリス産業史上画期的な産業への心理学の導入、不十分な国の失業保険を補う独自の失業保険制度——一九五五年アメリカの自動車メーカーがそれを採用したときは大ニュースになったが——は早くも一九二一年にラウントリーはスタートさせていた。また一九三八年には寡婦年金のための基金を始め、家族手当制度の国家的規模の実施を訴えつつ、先ずは自分のところで発足させた。ラウントリーは市民の生活と労働者の生活と分けて考えず、国民福祉と労働者福祉を結びつけて考えていた。ラウントリー工場の労働・福祉政策はイギリスで常に先端を切り、かくしてそこに小さな「福祉国家」がすでに生み出されていたのである。

この面にかんする研究は一九二一年『企業における人間的要素』(The Human Factor in Business, 1921)としてまとめられ、貧困の専門家であるとともにマネージメントのエキスパートとして内外にその名は轟いた。同年、始めてアメリカを訪れるが、アメリカではこの書によってつとに有名であり、工場訪問、講演、会談で大歓迎を受け、産業界関係の先駆者デニソン(H. S. Dennison)、ウォルフ(R. B. Wolf)らに会い生涯の友となっている。以後彼は何回もアメリカを訪問するが、一九二四年(大正一三年)には日本を訪れ歓迎された⁽¹⁴⁾とある。

もともと事業主の善意として始められた労働者福祉問題は、ラウントリーの時代となり産業における組織の中の人間の科学的研究に基づく理論と実践となった点、ホーソン実験のイギリス版として、その功績を分ち合えるものである。彼はホーソン実験の主班、メイヨー(E. Mayo)にも一九三八年に会っているが、ブリッグスは事実、ヨーク工場の試みは、しばしばホーソン実験に対比されたとのべている。

ここでまた話をベヴァリジにもどそう。一九一九年一〇月、ベヴァリジはシドニー・ウエップに招かれてロンドン経済大学の校長となった。彼の妻ビアトリス・ウエップの方は、ベヴァリジという人物に対して何らかの批判をいっていたが、この場合も夫ほど賛成ではなかった。当時ベヴァリジは最年少のパーマネット・セクレタリーとなり政府における地位は非常に上ったものの、大戦後は初めの頃のように政府の中で自分の力をふるう満足な状態におかれていなかったし、また経済学者にならんとすることもかねての夢でもあったので招きに応じた。

もともとウエップ夫妻を中心とした改良家グループの創立したこの大学は、経済学、人類学、社会行政、現代社会研究など従来の大学にない分野をひらく革新性にみちていたが、しかし社会主義大学というのでなく、偏よりなく人を集める努力がなされていた。ベヴァリジが来たとき、有名教授もあったが、非常勤教授が主で、校舎もオンボロであった。存在は意識を決定する。行動派であったベヴァリジは、学問は抽象論でなく観察、実験、比較、分類の科学でなければならぬこととともに、アカデミックな科学者は法則の発見こそその任務であって政治・政策にかかわることではない

ことを強調している。学校行政には大いに力をふるい、校舎も移転新築し規模を拡大し、一九三七年、ここを去るときの大学は一二〇人の教授、三〇〇〇人の学生を擁する世界の一大学術センターにまで成長していた。

ベヴァリジは、立场上、どの党派にも深入りせず独立を保ち、また政策は政党政治でなく、また官僚でもなく、専門家によってリードされるべきだという考えを強めていった（一九二〇年代、三〇年代）。

この時期におけるベヴァリジの政策への貢献としては、一九一九年設置の失業保険委員会の委員として活躍し、翌一九二〇年制定の失業保険法に対するものである。この法律は委員会におけるベヴァリジの提案と非常に近いものとなっている。その後ベヴァリジの社会保険構想は躍進し、失業を中心としつつも疾病、老齢、死亡、労災等さまざまな原因から起こる所得の中断を保険によって対処する『すべてに対して保険を』(Insurance for All and Everything)を一九二四年に発表する。これは小本ながらあの四二年リポートに比べ得るとされているが、これは自由党の公式政策として採用され、翌二五年寡婦・遺児・老齢拠出年金法として結実している。全面的保険とは遠く及ばないが、ベヴァリジはこれ、とりわけ拠出老齢年金を高く評価していた。

今一つの事柄としては、リバプールの博愛主義者ラスボーン (E. Rathbone) が一九二四年に発表した家族手当論議 (The Disinherited Family, 1924) に触発されて、家族手当問題を考究したこと、そして自らの大学のスタッフにこの制度を導入したことである。

この時代、ベヴァリジは若き日の情熱と理想を失い、保守的な考えにもかたむく向きもあったが、三〇年代初めはウェップ夫妻との関係は非常によく、彼らの労作『ソビエト・コミューニズム』(Soviet Communism ; A New Civilization, 1935) を極めて興味深く読み、政治・思想の問題としてでなく、社会の効率的組織としてソビエト体制に心ひかれた。当時彼は労働党の思想にもあきたらず、ウェップとの親交もあって再び社会主義にかたむくのであった。

四 ベヴァリジ報告作成とラウントリ

その頃、すなわち一九三六年、ラウントリは再びヨークにおいて貧困調査を行なった。第一回ヨーク調査は一九〇一年刊行以来、貧困問題の基本文献として寿命を保ち、一九二二年には第二版が出版されている。その間、一九一二年にはボリーイ (A. Bowley) が、ラウントリの貧困概念に基づく五都市の調査を行ない、ロンドン、ヨークに続くイギリス諸都市の貧困の現実を明らかにしたことも、ここに書きとめられなければならない。

ラウントリは、前述の産業人間関係の理論と実践にとりくむ一方、貧困研究の発展として再び調査に基づく最低生活の究明にとりくみ『労働の人間の必要』(Human Needs of Labour, 1918)を發表している。未熟練労働者が最低の文化的生活が保障されなかり産業平和はあり得ず、ゆえに最低賃金が不可欠であるとする立場から生計費を科学的に究明したこの書物は、戦後においてもこのテーマにかんする最上の科学的研究として高い評価を得ている。第三子以降の子について週三シリングの手当をという家族手当の提案がそこに含まれていたことも特筆すべきである。

第二回ヨーク調査は、前回調査時以来四〇年足らずの間に労働者の生活、貧困に起こった変化を追求し、かつまた二〇世紀来の社会諸政策の効果を明らかにするために一九三六年に行なわれた。その結果、著しい改善がなされているものの貧困問題の解決にはまだ道の遠いことがわかった。しかしその改善の証明は、ラウントリをして「この四〇年の間に労働者の経済状態には、甚大な進歩がなされて来た。我々は既に、スラムを廃止すると全く同じく、貧困を廃止するに測定可能な距離にはいっている。」⁽¹⁰⁾と言わしめ、報告書には「貧困」とともに「進歩」(Poverty and Progress, 1941)というタイトルがあたえられた。ブリッグスはこの二つの概念は同等のウエイトがあたえられていると解している。やがて戦争は始まったが、ラウントリは進歩・改善されるイギリスに希望をもち楽天的であった。しかしこの『貧困と進歩』の出版は、戦争のため等で遅れ、調査実施の五年後の一九四一年一月になった。ベヴァリジを主班とす

る社会保障の委員会が任命されたのはその数ヶ月後、すなわちその年の六月であった。

一方、ベヴァリジの方は、一九三七年、一八年間のロンドン大学を去り、オクスフォード大学に復帰した。一つにはアカデミズムに志向しつつも、ここでもまた彼は国家の政策問題にかかわることを止めることができなかった。一九三九年大戦勃発とともに、ベヴァリジは第一次大戦下の政治経験者として、国家の取るべき政策について強力に進言し、いたたまれずに、政府の中で力をふるうべく自分を売りこもうとすることがごとく失敗に終った。このときのベヴァリジをビアトリス・ウエップは「哀れなベヴァリジは壊滅状態にあった」と書き残している。とかくするうちにベヴァイン (E. Bevin) から、労働省に新設された福祉部へ招かれたが、彼は自分の望むところはマンパワーの仕事で福祉ではないとして断わっている。しかし一九四〇年、同じくベヴァインによって戦時マンパワーにかんする調査委員会委員長のポストが提示され、それは政策の中心にかかわる重要性をもつものではなかったが、ベヴァリジの望む仕事に関連するものであったのでそれを引き上げ、政策への足場を得た。そこではコール (G. D. H. Cole) と一緒に仕事をし、二人は相互に影響を与え合ったが、ベヴァリジはこの社会主義者から影響され、ますますラディカルな政策を考えるようになった。彼はコミニニズムは効率的組織として優れ、民主的条件の下ではコミニニズムもよしとまでいい、ビアトリス・ウエップをして「ベヴァリジは今や社会主義者になった」といわしめている。同年一〇月におけるベヴァインへの報告書では、労働と生活に対する国家統制の必要を強調しているが、それは政策にそれなりの効果を生んでいる。やがてベヴァリジはミリタリー・サービス部に登用されることになり再びフルタイムの公務員となる。のち、彼がベヴァリジ・レポートを生み出す社会保障委員会の長を任命されたとき、彼はこのポストをそれほど重視しておらず、なお戦時マンパワー問題の方に熱意をもち、それほど気乗りしていなかったのである。

社会保険および関連サービスにかんする委員会は、一九四一年六月に創設、翌七月第一回会議をもっている。それは社会の一大変革を要する福祉国家建設を志向して設置されたものでなく、その当時の事情から止むを得ず設けられたも

ので、したがってそんなに重要性をもつ委員会のはずではなかった。すなわち、事情は次の通りである。一つには、一九三八年来、労働組合の要求により国務省は労災保険問題を検討中のところ戦争により打切ったが、これに対する組合側の不満に何らかの対応が必要であったことである。もう一つには、保健省は健康保険の範囲を拡大し、給付水準を上げよという運動の圧力にさらされており、またこの医療問題については社会保障制度全体との関連において考えられなければならないという一般的要請が高まっていたことである。他にも要因はあるが、政府をしてこの委員会を設けせしめたのは以上二つの問題の対処を迫られていたからであった。

委員はベヴァリジを除いて社会保障関係省庁の一人の代表から構成されていた。前述したようにベヴァリジは戦争初期は社会福祉にかかわることを好まなかったが、政府の社会改良政策にコミットすることが、戦争のためにも必要であることを次第に認識し、この委員長任命によってこの考えを実行し、現行制度の改良にとどまらず全体的基本プランを作成する好機と考えるようになった。一度の会合をもっただけでベヴァリジは自分の基本構想『社会保険——一般的考察』(Social Insurance: General Considerations)を発表し、以後の委員会の流れを確定する。すなわち委員会の方向も進行もベヴァリジ一人によってほとんど支配されリードされることになったのである。基本問題はベヴァリジのみによって組立てられ、会の議論はベヴァリジによって選ばれた質問をめぐり、主として技術的な問題にとどめられた。他の委員はそれぞれの部所で戦時問題に忙しく、代案を出せることもなく、またベヴァリジは目的や原理についてメンバーに問うこともなく、また反対に対しては不寛容であったという。

同年秋には、ベヴァリジは『社会保障の基本問題』(Basic Problems of Social Security with Heads of Scheme)および『保険給付スケールと貧困問題』(Scale of Insurance Benefits and the Problem of Poverty)の作成に取組み一二月と翌年一月に続いて発表する。この二つはともに最終レポートに入れたもので、ベヴァリジの基本構想はこのときにできあがったといえる。しかし完成までには多くの解決しなければならない問題があった。生存(subsistence)の

定義・構造の如き原理的な問題、新制度の行政体系、財政問題その他の細目がそれであつて、それらは四二年を通じて委員会で検討されたが、ベヴァリジは自分の考えを余り変えることなく、また矛盾するところも十分には解決しないまま最終リポートが完成されたのである。

このベヴァリジ・リポートをめぐつて、ベヴァリジとラウントリーの直接的な関係が現われる。すなわち、前述の『保険給付スケールと貧困問題』については、ラウントリーの調査研究からベヴァリジは多くのインスピレーションを得ているのである。そのとき、ベヴァリジはラウントリーに、『貧困と進歩』と『労働の人間の必要』について非常に興味深く丹念に読んだこと、そして貧困問題等についていろいろ語りたいことを手紙に書き、保険給付水準として第一次貧困の基準をとることは適切か、現代の栄養基準からしてこれをどう修正するのがよいか等々討議課題を提示し、クリスマスのときに会えないかと求めている。これに対しラウントリーは彼の協力者スチュアートと問題を改めて検討し、第一次貧困線は適当でなく「ヒューマン・ニーズ・スケール」にあわすことがよいこと、また老齢年金生活者にかんする詳細な統計をあつめ、家賃についての手当の問題をさらに入念に調査検討することの必要をベヴァリジに書き送っている。ラウントリーは同じく貧困調査研究者ボーリイなどとともにベヴァリジ委員会の専門小委員会のメンバーであつた。ベヴァリジは、たとえば一九四二年二月発足の行政問題委員会では、委員の意見も十分きかず自分の結論を押しつけ委員たちの反撥をかたたりしているが、このラウントリーの委員会には重きをおいていたという。要するにラウントリーは、前記の二つの覚書について、また最終リポート草案についても詳しいコメントを書き送り、ベヴァリジとの交信は最後まで続いたのである。

このベヴァリジの委員会が設けられた政治的背景については先にふれたが、一般社会情勢の中でラウントリーとの関連で特筆すべきものは、労働者生活状況にかんする社会調査による諸事実の発見とそれに基づく社会改良への世論の形成である。ベヴァリジは、最終リポートに「関係各省委員会の仕事は、社会保険および関連サービスに関する現行制度

の検討にはじまった。その仕事の締めくくりである社会保障計画は、窮乏の診断——すなわち、現在の戦争以前においては、英国の家族や個人が健康上の最低生活を支えるに足るだけの資力を欠いていたという状況の診断——から出発している」とし、これらは「偏見のない科学の権威者たち」のイギリス諸都市における「社会調査」の成果だと記している⁽¹⁴⁾。なかでもラウントリーの調査、とくに委員会創設の数ヶ月前に発表された第二回ヨーク調査が大きな役割を果たしていることは推察に難くない。その調査は貧困解決への道はまだまだ遠いことを明らかにするとともに、二〇世紀初期からの福祉政策の展開はそれなりの効果を生み、政策のさらなる前進が貧困問題解決を可能とする希望と確信を人びとにあたえたといえるからである。

報告書の署名については周知のトラブルがあった。ベヴァリジだけの署名となったことは止むを得なかったし、結局はベヴァリジのワンマンチームであった委員会の経過からして、それは当然でありかつ適切であったともいえよう⁽¹⁵⁾。とにかくベヴァリジにとっては、これによってはずも自分の名を不朽ならしめることになったのである。

五 福祉国家成立をめぐる

報告書は一九四二年一〇月に完成し出版の用意が整ったが、それが余りにも革命的であるがゆえに政府の中で不安も問われてすぐには出版されなかった。日の目をみないのではという噂も流れたが、しかし結局、『社会保険および関連サービス——サー・ウィリアム・ベヴァリジによる報告』(Social Insurance and Allied Services, Reported by Sir W. Beveridge)として出版され、英国民歓声の中に超ベストセラーとなり、イギリスを越えて世界を席卷した。即時実行を望む声もわき起こったが、批判もあれば反対もあった。批判は主として右からであったが、左からの攻撃もあった。ビアトリス・ウェップは、体制の変革に及ばなかった一九〇九年委員会の二の舞をベヴァリジは演じてしまい、これで失業や低賃金問題を解決できようかと厳しく批判した。しかし賛同の波は圧倒的で、それは前年「大西洋憲章」で謳わ

れた社会保障の権利の実現プランと受けとめられ、折しもその時期が、第二次大戦の守勢から攻勢・勝利への希望ある転換期（北アフリカ戦線アラメインの勝利）であったことも幸して、ベヴァリジ・プランはイギリスが希求する未来の国のあり方と受けとめられた。かくしてベヴァリジはイギリスの未来のシンボルとなりイギリスの英雄となった。

情報局は、それはベヴァリジ自身の主張するところでもあったが、ベヴァリジ・プランを戦争に勝ちぬくための戦意高揚、国民総力の結集のための宣伝に使った。ラウントリーは社会保障、雇用政策の歴史における画期的事件として、これによって長年の経済的不公正は終焉し真の社会進歩がなしとげられるとして、早期立法化を訴え、宣伝につとめた。一九四二年はリポート完成の年であったとともに、六三歳の彼にとって初めての結婚の年であった。相手は四〇年間交際を続けてきたメアー夫人 (Janet Main) である。彼は人からどうしてこの年齢まで結婚しなかったかと問われ、「彼女は私の友人であり従兄である人と結婚した。だから私は彼女を待たなければならなかった」と答えたという。彼女の夫デビッド・メアーはその年の夏に死に、ベヴァリジと彼女とは同年一月一日、空襲で破壊された教会でささやかな式をあげた。

ベヴァリジの生涯を通じて大きな影響をあたえた女性は四人ある。母親のアンネット、ガードナー夫人 (R. D. Gardner)、ウェップ夫人、およびこのメアー夫人である。⁽⁶⁾ベヴァリジは家族を大事にし、成人した後も近況報告を少しも怠らず、重要な決定に際しては必ず両親に相談した。とくに母との関係は密接で母の意見は十分尊重した。彼は三〇歳なかばに達しても子どものように母を理想化していた。ガードナー夫人とメアー夫人とは、ともにトインビー・ホールやモーニング・ポスト時代の友人である。ガードナー夫人はCOSで活躍する四〇代の夫亡人で、彼自身の母と似てラディカルを嫌う保守派に属し、当時ベヴァリジがウェップ夫妻や社会主義に近づきすぎるのを引きとめるのに力があつた。彼はこのガードナー夫人を自から「ロンドンの母」と呼んでいる。メアー夫人との付き合いはメアー家全体との付き合いであった。夫であり従兄でもあるデビットはピアーソンとも親交がある数学者で高級官吏であった。メアー夫人は

孤独な独り者ベヴァリジに暖かい家庭をあたえ、家庭的雰囲気をも満足させた。

彼女は才氣あふれる活発な婦人で、ベヴァリジと相互に影響をあたえ合った。ロンドン大学時代にも第二次大戦中にも、ベヴァリジとの関係でそれなりのポストをあたえられ、一緒に仕事をする事ができた。仕事においても余暇活動においても二人は常に共にあり、ウェップ夫人は、ロンドン大学におけるこのようなベヴァリジの振舞を案じもしている。ハリスは、メアー夫人を欠いてベヴァリジの人生は語れないといいつつ、同時に、彼の社会的、政治的思想や行動に影響をあたえたものとしては、ガードナー夫人やウェップ夫人の方がはるかに大きいとしている。しかし、このメアー夫人はベヴァリジの生涯唯一の伴侶となったわけであるから、ベヴァリジにとっては第一の女性であるといわなければならぬ。しかもベヴァリジ・リポートを書くことについて彼女は彼を大いに励まし、ハリスのいうように、その内容についても彼女の影響するところなくはなかったと推察されるからである。

翌一九四三年、ロックフェラー財団に招かれて彼と新しい妻はクイーン・メリー号でアメリカへの三ヶ月の旅におもむいた。そこでベヴァリジは彼の報告書について何回も突に多くの講演を行ない、ルーズベルト大統領、パーキンス労働大臣とも会談した。

以後、終戦まで彼はリポートの実現に政治的圧力をかけること、完全雇用問題をまとめることに力を注いだ。一九四四年それは『自由社会における完全雇用』(Full Employment in A Free Society)として刊行されるが、同年、ある地区から自由党候補として選挙にたち、当選するが、労働党が勝利する次期選挙では敗退するひとコマもあった。

戦後、ベヴァリジ報告に基づいて一九四五年、家族手当法を皮切りに次々と社会保障諸立法が制定され、数年にして福祉国家は完成される。イギリス国民にとって待望の平和とともに福祉が訪れたのである。ラウントリーは全く満足であった。

一九五〇年、ラウントリーはすでに八〇歳に達しようとする高齢にもかかわらず、三回目のヨーク調査を行ない、翌

五一年、『貧困と福祉国家』(Poverty and the Welfare State)として発表するが、それは福祉国家を再検討するのではなく、この福祉施策の発達が前回調査時より如何に貧困を減少させたか満足するためであった。ちなみに、この調査結果は、社会保障の充実を標榜する労働党が、ラウントリーにことわることなく選挙戦に利用したことである。同じ五一年に、『イギリス生活とレジャー』(English Life and Leisure)を出版しているが、これも調査(いづれかという)とルーズな方法であるが)に基づく作品で、対象は始めて労働者階級を越えて中産階級にも及ぶ「労働」でなく「レジャー」が主題である点、二〇世紀における社会発達とラウントリー自身の思考の推移を象徴している。このレジャーのうちラウントリーはギャンブルの問題に特別な関心をいだき、一書を著わすべく研究を続けていた。しかし三年後の一九五四年一〇月七日、突如として死は訪れた。それまで健康に不安があったわけではない。その前二日間、ロンドンでの忙しい仕事を終えて帰って来たばかりであったのに……心臓発作の一時間後に彼は死んでしまったのである。八三歳であった。

ベヴァリジは、戦後、「福祉国家の父」といわれ、イギリス社会政策の大天才として内外に知られた。彼はフレンドリー・ソサエティ全国本部から求められて、一九四八年、『ボランティア・アクション』(Voluntary Action: A Report on Methods of Social Advance)を発表する。⁽¹⁷⁾また同年、二人で世界一周の旅に出て各地で福祉問題の講演をした。家庭において二人は若夫婦のように楽しく、活気に満ち、ベヴァリジの生涯で一番幸せな時であったといわれる。一九五三年、ベヴァリジは自伝『強制と説得』(Forcer and Influence)を書き、夫人の方は、『ベヴァリジと彼の計画』(Beveridge and His Plan)を出した。

かつて旅行中、早朝起きるやいなや船のプールに飛び込み、テニスでは他の船客を次々打まかした活気あふれるベヴァリジも後年、次第に衰えていった。肉親や親しい人たちを次々失い、一九五九年には遂に夫人も失い、ゆく年齢とともにいい知れぬ淋しさの中にあつた。かつて少年時代、あの大英帝国の植民地インドにおいて、二六人の召使にかしづ

かれる華やかな生活は、召使の時代が過ぎ去った今は、年老いた孤独な年金受給者の生活に変わっていた。このベヴァリジの姿は、二〇世紀前半までの輝かしいイギリスの日はかたむき老大国に沈みゆくイギリスを象徴するかのようであった。しかし彼はたたかいを止めなかった。彼は平和が再び冷えてゆくきびしい世界情勢の中で、社会政策よりも何よりも先ず平和を訴え続け、生涯のもう一つの仕事として若き日より取組んだ物価の歴史的研究に最後の力をふりしぼった。しかし一九六三年三月一日、継娘ルーシー・メアーなどの訪問中に八四歳のベヴァリジは静かに息をひきとったのである。

六 政治・思想におけるラウントリーとベヴァリジ

ラウントリーとベヴァリジとは八三歳と八四歳という奇しくも同期間をほぼ同時代に生き、以上みたようにイギリス福祉国家形成発達に不可欠な役割を果たした。彼等とともに社会改良家というものの典型であり、その双壁といえるであろう。そして二〇世紀の組織社会にはかような種類の人物はますます求め得なくなったというところで最後の社会改良家であるともいえるかもしれない。この基本的な共通点が本稿のテーマであったわけであるが、以下、いくつかの側面について両者の共通点と相違点を整理することによってまとめたい。

まず思想や政治の問題であるが、両者はともに自由主義、自由党に最も深く結びついていた。かかわりの深い政治家としてはラウントリーはロイド・ジョージ、ベヴァリジはチャーチルであったといえよう。現状にあまんじない革新性は両者共通のものであるが、社会主義に近づきつつも踏みとどまった点も似ている。しかしウェップ夫妻との親密さにおいてラウントリーより遙かにすぐれていたベヴァリジは、社会主義にそれだけ近くにいったといえよう。

ラウントリーは彼の第一回調査をめぐる時期において、無制限な個人主義よりはむしろ社会主義に共鳴していた。たとえば一八九七年、彼の成人学校における社会主義についてのコメントでは、社会主義は機会均等を可能にするよきも

のとしてゐる。しかし、人間が今到達した段階を先に越えて制度化しても役立つものでないと言及し、また彼の第一回調査の主要協力者ケンダル (M. Kendall) やラスカー (B. Lasker) などは、ヨーク市におけるフェビアン協会の設立を助けたが、ラウントリー自身はそれに加わらず、社会主義とは一線を劃していた。

一方ベヴァリジは若きトインビー・ホール時代、自分を社会主義的と見做していたし、ときとしてかなり右に傾くこともあったが、一九三〇年代後半から四〇年にかけて非常に社会主義に接近した。国家あるいは全体は個人に優先し、個別的断片的アプローチでなく社会的制度的アプローチを重視するベヴァリジは、第二次大戦の戦時国家体制下に、その考え方をさらに強め、国家統制とともに平等主義、集団主義を強調した。民主体制下においてはコミュニズムもよしとし、ピアトリス・ウエップをしてベヴァリジは今や社会主義者だといわしめたことは先に述べたところである。しかし彼は社会主義思想に共鳴したわけではない。それは組織の効率の問題や行政管理技術の方法として価値あるものと考えるのである。

真の社会主義者は労働者の側にその立場をおくものでなければならぬであろう。労働者階級との関係についていえば、ベヴァリジには、労働者に親しく接し、その生活を真に理解し、労働者に共鳴する、そういう体験はなかったように思える。職業紹介事業において失業労働者等に接することもあったであろうが、事業は労働者の生活を第一とするよりも、雇用問題や産業社会の効率の問題と受けとめられていた。若き時代、母アンネットや「ロンドンの母」ガードナー夫人に引きもどされたことも大きな理由であろうが、彼が社会主義者になり得なかったのは、労働者との親密な関係を体験的にもち得なかったことも一つの大きな理由であろう。

ラウントリーについて労働者との関係をいえば、ブリッグスはその評伝において、ラウントリーの接する労働者は彼の成人学校クラスのそれであり、事業主としての彼は必然的に距離をおいて労働者をみていたという。しかし丹念な実地調査による労働者の生活の理解は労働者との距離を短縮し、ヒューマニストとして労働者への暖かい心、労働者の側

に立つ立場といったものが彼の論述から十分よみとれるのである。

社会問題に対する探求心、社会改良の熱意はともに優るとも劣らない。問題へのアプローチとして科学的方法を強調したことも共通しているが、そこにまた大きな違いもみられる。二人ともハクスリーの経験科学的方法に共鳴し、観察・帰納的方法を重視した。ラウントリーはそれを地で行く社会調査に専念し、事実を明らかにすることに徹し、主張や提案は素材に基づき、しかも非常にひかえ目であった。これに対してベヴァリジは、ホール時代に多少の経験はあるとしても、ラウントリーのような調査研究者では決してなかった。ハリスはその評伝で、彼の覚書、報告書、その他書きものには沢山の統計資料が含まれていることを特徴とするものの、それは他のものによって得られた彼の主張を正当化し補強するための手段であったといっている。ラウントリーの場合は調査が生み出した結論であり、ベヴァリジの場合には先に結論があつて調査がそれに利用されるのであり、対照的である。調査派ラウントリーに対してベヴァリジは何よりも政策派、行動派であつたのである。

性格もまた対照的であるといえる。地道でひかえ目なラウントリーは、常に表面に立たず、いわば影の人として政策についてはアドバイザーの役割に徹し、かつそれに満足していた。これに対してベヴァリジは出るどころへ出ないと承知せず、自己を顕示し、しばしば強引ですらあつた。ラウントリーが再建問題の委員長であつた一九一六年のこと、ピアトリス・ウィップはラウントリーについて、問題にとりくむことまことに熱心であるが、しかし余りにもひかえ目のためらいがちであり会をリードできなかつたと日記にしている。あの社会保険委員会のワンマンの、強引であつたベヴァリジとまさに対照的というべきである。ベヴァリジは仕事には、ドライで、ぐずぐずしているのには容赦がならなかつた。

性格を異にし、行動力、政治力についてそうした違いはあれ、あくことなき問題追求、ハードワークを旨とし瞬時も止めることなく進み続けた点、両者は全く同様である。彼らは死の直前まで、永年の課題にとりくみ仕事を続け、ラウ

ントリーはギャンブルの問題、ベヴァリジは物価の歴史研究、最後の大作となるべきこの研究はともに未完として残されたのである。ベヴァリジは倒れうわごとをいう中で、最後に極めてはっきりと言ったという。「しなければならぬことばかり一杯だ。」(There is a thousand things to do)。ラウントリーは心臓発作の一時間に死んでしまった。彼の最後の言葉はなかった。もし彼がそれを言うことができたら、きっとベヴァリジと同じことを言ったに違いない。

二人の偉大なソーシャル・リフォーマーは逝き、イギリス福祉国家は残った。六〇年代を進行する世界の中で、先進国イギリスは老大国となり、消滅したはずの貧困は再発見され、福祉国家は再検討され、新しい改革への戦いが開始された。ソーシャル・リフォーマーはもういない。それに取組むものはティトマス (R. Timuss)、タウンゼント (P. Townsend)、アトキンソン (A. B. Atkinson) その他学者たちである。ラウントリーが生まれ、ベヴァリジが生まれて一〇〇年を経過した今日である。

注

(1) José Harris, *William Beveridge: A Biography*, Clarendon Press, 1977, p. 452.

(2) Asa Briggs, *A Study of the Work of Seaborn Roventree*, Longmans, 1961, p. 86. 一九五五年二月放送の中で言われた。

(3) *Ibid.* p. 1.

(4) 本稿は前記(1)(2)の二つの『評伝』を中心の資料として書かれた。この二著については、特別な場合を除き参照ページは割愛する。いずれも手紙等も含む丹念な資料をもとに書きあげられた(1)は四八八ページ、(2)は三七一ページからなる克明な評伝である。しかし、ベヴァリジの場合、彼の自伝『強制と説得』は参照されたが、彼の夫人 Janet の *Beveridge and His Plan*, や、その他重要関係文献(これらは二著に含まれているとしても)を直接参照していない点、本稿の限界とするところである。

(5) 「ヨークにおける生活状態の内容に立入って調査をすすめてゆくうちに展開されていく事実のもつ重大な意義について、わたしは、大いに心を打たれた。未曾有の好況に恵まれて、限りなき富を抱いているわが国の現状においてすら、総人口の約四分の一以上のものが貧乏生活をしているのである。この事実こそは、まことに、わたくしの調査結果の重大な核心をなすものである。いかなる文明といえども、その根底に、打ちひしがれ、完全な成長をばばまれている多数のひとびとをもっている、到

底、健全着実な発達を成就し得るものではない。この意味において、わたくしは、わが国民の福祉に対して、一段と、「深きおもい」をいたさなければならぬと信じるものである。……いまや、マルサス主義哲学の暗影は、拭い去られた。換言すれば、ひとびとがその本質の、より高尚な部分を去勢し破壊するような生存競争を行なうべく、不可避な法則に運命づけられていると、いうような社会秩序は、もはや容認されないのである」長沼弘毅訳『貧乏研究』ダイヤモンド社三四〇―四一四ページ。

(6) W. Beveridge, *Poverty and Influenza*, 1953. 伊部英男訳『強制と説得』至誠堂、一九七〇年。九ページ。

(7) Harris, *op. cit.*, pp. 41-43.

(8) ハイネットはオクタビア・ヒルの下でレディ・ビクターとして活躍した才媛ヘンリエッタを妻とした。このことから初期ホールはCOS方式が濃厚だったのである。

(9) スミスはチャールズ・ブースのロンドン調査を手伝い、のち一九三〇年代前半、ブースの方法にならってロンドン再調査を行なう *New Survey of London Life and Labour Vols. 9, 1930-35* を完成させた。ベヴァリッジと同じくペリオール出身で二人はホール時代からの知り合いである。スミスもフェビアン社会主義に魅せられたが、役人になってからは社会主義者というイメージを除去すること、ウエッジ夫妻の影響から逃れることに汲々とした。二人は親友になり、ともにチャーチルの支持を得て仕事にはげんだ。(Harris, *op. cit.*, pp. 147-48)

(10) これはヨーク調査からの協力者 B. Lasker との共著である。

(11)ブリッグスは、ラウントリーが東京と大阪で「労働関係」について講演し大成功をおさめたと記している (Briggs, *op. cit.*, p. 182) なお *Poverty* の訳者長沼弘毅は「訳者序」において一九五一年秋ラウントリーは日本を訪れ菊の花の美しさに引かれ種をとりよせ翌年見事な花を咲かせたと伝えられるとしている。

(12) B. S. Rowntree, *Poverty and Progress*, 1941. 厚生大臣官房総務課訳「最低生活の研究―貧困と進歩」一九五一年、二二―七ページ。

(13) スラム街児童の学童疎開等によって大都市の貧困の現実が日の目をみるなど社会問題の顕在化、戦争による生活圧迫による社会問題の深刻化。この問題解決にあたるのが国民結集、戦意高揚のために必要であったこと。また戦時体制に基づく国家統制強化は政府に思い切った政策をとらしめることを可能にした。

(14) *Social Insurance and Allied Services Reported by William Beveridge 1942*. 山田雄三監訳『ベヴァリッジ報告社会保険および関連サービス』至誠堂一九五〇年。六ページ。なかでも彼は当時の最新調査であるラウントリーの『貧困と進歩』スミスの

ラウントリーとベヴァリッジ

『ロンドン新調査』を重視し丹念に検討した。(Harris, op cit., p. 393)

(15) もともとこの委員会はかかる基本的大改革を志向して設置されたものでなかった。しかしベヴァリジのプランは予期せぬ大変革を内容とし、関係省庁代表委員も省庁自身も、責任をもちかねたことから、署名はベヴァリジ一人のものとなった。ベヴァリジはこの結果は報告書の重みが損なわれるのでないかと不安ももった。

(16) ブリッグスのラウントリー評価にはベヴァリジの場合に類する影響力ある婦人は登場しない(父親の影響極めて大である。)ビアトリス・ウェップについていえば、第一回ヨーク調査中の一八九九年三月にウェップ夫妻はラウントリーを訪問したとある(Briggs, op cit., p. 23.)、以後何かと関係のあったはずであるが、ベヴァリジほどではない。それだけラウントリーは社会主義とは離れていたといえる。ウェップ夫妻もイギリス福祉国家形成にラウントリーやベヴァリジに続く功労者であろう。ベヴァリジはしかし女性崇拜者ではなかった。若い頃の保守的な母の影響もあって婦人運動や女性解放主義には賛成的ではなかった。

(17) ベヴァリジはホール時代から、個人が全体に結集され相互の連帯によって結ばれる組織の確立をあるべき社会と考えていた。ハリスも指摘するように、これはデェルケームの社会理論に似ている。彼は社会保険制度をこうした社会連帯への道と考えていた。彼は「福祉国家」という言葉を好まず「ソーシャル・サービス国家」を好み、市民の権利とともに義務を強調した。社会保険制度完成の中で彼はヴォランタリー活動の必要性和その動員を訴えたのである。

(18) ラウントリーはギャンブルの問題にかねてより非常な関心をもっていた。かつて第一回ヨーク調査では労働者の収入の六分の一が酒に消費されていることを明らかにし、労働者の生活への酒の支配を憂えていたが、新しい時代には酒にかわってギャンブルが労働者の生活を毒す社会問題であると彼は考えた。長時間低賃金労働から解放され豊かな余暇をいかに有意義に使用するか、それがラウントリーの現代労働者問題の課題であったわけである。

(19) ラウントリーは非常に楽天的な性格であったこともあって、福祉国家に全く満足していたが、ベヴァリジはそうでなかった。一九五〇年代の「貧困消滅説」にも彼は加わっていない。彼自身、孤独で老いてゆく、決して豊かではない一人の年金生活者である体験は福祉国家の厳しい現実を知らしめた。

〔後記〕 本稿は本年三月嶋田啓一郎教授の定年退職を機に書かれた。社会保障とイギリスの問題にわが目をひらき、またベヴァリジに大きな影響をあたえたウェップの『ソビエト・コミュニズム』研究は、丁度三〇年前の、先生指導によるわが大学院時代のよき思い出である。(一九八〇年四月)